

国際武道大学研究紀要

第 32 号 (2016)

目 次

〈原著論文〉

後藤 豊・伊藤 清良

鉄棒運動における「片膝かけ上がり」の指導に関する運動学的研究 …………… 1

〈短 報〉

望月 好恵・前川 直也・徳永 文利

外国人選手との交流が日本人学生選手の英語学習の動機づけに与える影響について …… 9

〈研究報告〉

大西 基也・百武 憲一

高等学校硬式野球部の経営に関する研究

—甲子園出場経験のある硬式野球部を対象として— …………… 15

佐々木 克実

スペイン語における所有形容詞の変遷とその用法について …………… 23

奥山 秀雄

国際武道大学のバスケットボール授業における認知と習熟

—学生の自己評価による理解度と達成度— …………… 29

多田 寿康・黒田 敦子・佐々木 克実

国際武道大学の英語, フランス語, スペイン語授業において学習させるべき語彙について …… 41

〈資 料〉

松村 さくら・小西 由里子・谷口 有子・大川 昌宏・井上 哲朗・見波 静・森 実由樹

半年間の定期的な集団運動教室受講生の行動変容について …………… 75

山平 芳美・木村 寿一・松井 完太郎

国際武道大学による Sport for Tomorrow への貢献

—2020年東京オリンピック・パラリンピックに向けた取り組み— …………… 79

廣瀬 恒平・酒井 誠・西園 聡史

近代フットボールの現在 …………… 89

〈展 望〉

森 実由樹

Functional Movement Screen の活用について

—高齢者に着目して— …………… 103

教育研究活動報告

〈研究成果報告〉

- 山平 芳美・高見 令英・松井 完太郎・木村 寿一・徳永 文利
開発途上国における日本の体育大学生による体育・スポーツの国際協力
—スポーツ・フォー・トゥモローとの連携事業— …………… 109
- 大川 昌宏・矢崎 利加
日本人大学女子柔道選手における SJFT (The special judo fitness test) と下肢骨格筋の
動員様相について …………… 118
- 小西 由里子・井上 哲朗・森 実由樹・大川 昌宏・立木 幸敏・
刈谷 文彦・松村 さくら・谷口 有子・見波 静・長濱 秀紀
地域における健康・体力づくりの企画と実践・成果 …………… 121
- 高木 誠一・中西 純・佐藤 記道・中村 功樹
子どもの発達過程と家庭環境の関連性に関する縦断的研究 …………… 125
-

〈原著論文 (縦書き)〉

- 立木 幸敏・仙土 克博・吉田 鞆男
小野派一刀流における「切落」の由来について
—「三重」および「五点」を参考に— …………… 131

鉄棒運動における「片膝かけ上がり」の 指導に関する運動学的研究

後藤 豊，伊藤清良

要 旨

本研究の目的は、鉄棒運動の「片膝かけ上がり」の指導方法を明らかにすることである。そのために、「片膝かけ上がり」の指導実践が、発生運動学の観点から考察された。そこでは、「片膝かけ上がり」の学習における、補助器具パイプの有用性が示された。

キーワード：器械運動，鉄棒運動，補助器具，片膝かけ上がり

外国人選手との交流が日本人学生選手の 英語学習の動機づけに与える影響について

望月好恵, 前川直也, 徳永文利

要 旨

外国人選手との交流が日本人学生選手の英語学習の動機づけにどのような影響を及ぼすかについて、質問紙調査を実施して検証することを試みた。協力者は千葉県内にある体育系大学のバレーボールチームのメンバーである。彼らが交流したのはカナダから来日した大学バレーボールチームであり、練習だけでなく日常生活時間も共に過ごす機会があった。調査の結果、英語・英語学習や英語圏の文化や人々に対する意向について有意な肯定的変化のあることが把握でき、英語学習の動機づけに良い影響があったことが確認できた。

キーワード：外国人選手, 交流, 学生選手, 英語学習, 動機づけ

高等学校硬式野球部の経営に関する研究 —甲子園出場経験のある硬式野球部を対象として—

大西基也, 百武憲一

要 旨

本研究では、経営資源に着目し過去10年間で甲子園に出場経験のある高等学校硬式野球部の経営に関する特徴を明らかにすることを目的として、高等学校硬式野球部（40校）の指導者を対象にアンケート調査を行った。分析の結果、甲子園出場経験のある高等学校硬式野球部の特徴が以下の通り推察された。

監督の現任校での指導歴が11年以上を有することで監督の指導方法が浸透し、勝利に結びついている。

特定の高等学校硬式野球部と監督だけが甲子園に出場し続けている訳でない。

練習試合可能な規模の専用グラウンドで練習することが試合に直結した技術向上に繋がり、甲子園に出場できるだけの競技成績を取めることに繋がっている。

支援団体や支援者からの金銭支援や物品支援で年間予算額を補っている。

競技成績を重要視しながら、人間教育も競技成績以上に重要視して、社会に通用する人間形成を行っている。

以上の知見は、高等学校硬式野球部の競技成績を向上させるための条件整備の指針になると考えられる。

キーワード：野球, 高等学校硬式野球部, 経営, 経営資源

スペイン語における所有形容詞の変遷とその用法について

佐々木克実

要 旨

ラテン語（厳密に言うと俗ラテン語）から派生したロマンス諸語のひとつであるスペイン語ではあるが、他のロマンス諸語と比較すると、発音、文法、語彙等色々な面で相違がある。

本稿では、その相違の中でも非常に興味深い事項である、スペイン語の所有形容詞に関して見ていく。なぜなら、他のロマンス諸語には見られない、特有の形および用法があるからである。

つまり、スペイン語の所有形容詞には前置形（短縮形、弱勢形）と後置形（完全形、強勢形）が存在し、現在も各々異なる働きを持って使用されている。この二つの種類の所有形容詞を有するロマンス諸語はスペイン語以外にはない。

また、スペイン語の所有形容詞前置形は冠詞、指示代名詞とともに用いられない。これは他の多くのロマンス諸語では行われている用法である。

従って、これら二つの所有形容詞の形態、そしてその用法がなぜ生まれ、そしてそれらがどのように用いられてきたかを検証し、また、なぜ所有形容詞の冠詞、指示形容詞との併用が許されないのかを考察することが本稿の目的である。そのためにそれらの所有形容詞の成り立ちとその形態及び統語の分野における変遷と用法を見ていった。

キーワード：スペイン語、所有形容詞前置形、所有形容詞後置形

国際武道大学のバスケットボール授業における認知と習熟 —学生の自己評価による理解度と達成度—

奥山秀雄

要 旨

本研究では、国際武道大学の実技系授業（バスケットボール）の受講生185名から得られた授業の進行過程における課題に対する理解度と達成度を分析し、授業課題に対する学生の認知・習熟の関係を明らかにすることを目的とした。その結果、

- 1) すべての課題において、理解度は達成度に比較して高い値を示した（4.16pt～4.62pt・3.98pt～4.52pt）。
- 2) 理解度における変動係数（個人差）は、すべての課題において、達成度より低い値を示した。
- 3) 授業過程前半の課題に対する理解度と達成度の相関は低く、課題に対する認知と習熟にずれがみられた。しかし、授業過程前半から終盤においては、課題に対する理解度と達成度は共に上昇し、両者には高い相関関係が認められた。

以上の結果から、授業計画に基づいて実施された国際武道大学におけるバスケットボールの授業課題に対する認知と習熟の関係が明らかになると同時に、今後、これらの結果を基にした授業改善を行う際に必要となる、新たな要因について、さらに検討を加えることの必要性が示唆された。

キーワード：バスケットボール授業、課題の認知と習熟

国際武道大学の英語，フランス語，スペイン語授業において 学習させるべき語彙について

多田寿康，黒田敦子，佐々木克実

要 旨

本学の外国語教育の中でヨーロッパ系言語である英語，フランス語，スペイン語の授業において，本学の学生に向けた本学の特色を出した教材開発を視野に入れて，手始めに語彙と表現の面からのアプローチを試みた。他の一般向けの教材との差別化を図りつつも，武道・スポーツの場面に限定しない日常的な汎用性の高い語彙や表現を取り上げることは実用性の面で避けられない。ただし，その中であっても武道・スポーツ関係の話題に触れることで，自然にその方面の語彙・表現を学習できるようにした。ここに挙げたリストは必ずしも固定的なものではなく，さらに良いものにするべく今後も常に見直しが必要であると考えます。

キーワード：国際武道大学，英語，フランス語，スペイン語，語彙，表現，体育，武道，スポーツ

半年間の定期的な集団運動教室受講生の行動変容について

松村さくら (国際武道大学), 小西由里子 (国際武道大学), 谷口有子 (京都学園大学),
大川昌宏 (国際武道大学), 井上哲朗 (国際武道大学),
見波 静 (社会福祉法人よしだ福祉会), 森実由樹 (国際武道大学)

要 旨

本研究では、6か月間の運動教室受講生41名(男:15名,女:26名,年齢:66.8±7.27歳)の、運動行動変容ステージと運動セルフ・エフィカシーの変化について検討した。その結果は次の通りである。

- ① 受講生41名の運動行動変容ステージは、3名(7.3%)に1ステージ以上の低下を認めたが、その他38名(92.7%)は維持もしくは1ステージ以上の向上がみられた。41名全体の運動セルフ・エフィカシーは低下していた。
- ② 運動行動変容ステージが維持もしくは向上した38名の運動セルフ・エフィカシーも、低下を示した。
- ③ 運動行動変容ステージが向上した14名の運動セルフ・エフィカシーも、教室後に低下がみられた。

キーワード：運動行動変容ステージ, 運動セルフ・エフィカシー, 中高齢者, 集団型運動教室

国際武道大学による Sport for Tomorrow への貢献 —2020年東京オリンピック・パラリンピックに向けた取り組み—

山平芳美, 木村寿一, 松井完太郎

要 旨

2013年9月7日（現地時間）、アルゼンチンのブエノスアイレスにて開催されたIOC総会において、2020年東京オリンピック・パラリンピック開催が決定した。安倍晋三首相はIOC総会のプレゼンテーションにおいて「Sport for Tomorrow（以下、SFT）」を公にした。SFTは、日本国政府が推進するスポーツを通じた国際貢献事業である。SFTとは、2014年から2020年までの7年間で、開発途上国をはじめとする、100カ国以上・1,000万人以上にスポーツの価値を伝える取り組みである。

国際武道大学は、2015年にSFTのコンソーシアム会員となり、SFT認定事業に取り組んでいる。

本研究は、本学が実施したSFT認定事業を通じたSFTへの貢献とSFT認定事業を実施したことによる本学にとっての派生的な効果を明らかにしていくことを目的とした。

本学は、2016年9月末までに国内外合わせて7つのSFT認定事業を実施し、65カ国（地域）と裨益者1,897人というSFTへの貢献であった。また、SFTを通して「広報による社会的認知度の向上」、「産学連携」、「進路開拓」に関する派生的な効果が確認された。

キーワード：武道、体育、スポーツ、国際協力、産学連携、進路開拓

近代フットボールの現在

廣瀬恒平, 酒井 誠, 西園聡史

要 旨

近代フットボールには7種類がある。それらは、アソシエーション・フットボール（サッカー）ラグビーユニオン・フットボール ラグビーリーグ アメリカンフットボール オーストラリアンフットボール ゲーリックフットボール カナディアンフットボールの7種である。

1980年代の初めにおいては、最も普及度が高かったのはサッカーであり、150を超える国々でプレーされていた。他のフットボールはもっと狭い地域に限られていた。ラグビーは、いわゆる英国の影響の強かった国々とフランスや南アフリカ共和国などまでの普及が限度であった。オーストラリアンフットボールは、オーストラリア、ニュージーランドおよびポリネシアの諸国に限ってプレーされていた。ゲーリックフットボールは、アイルランド国内での普及と、ヨーロッパや北アメリカへ移住したアイルランド人移民たちがプレーするにとどまっていた。カナディアンフットボールは、カナダ国内でのみプレーされていたにすぎなかった。

この度、筆者らは、これらの近代フットボールについて、1980年代から現在に至るまでの普及度の変化について調査を試みた。範囲は、統括組織、オリンピックへの参加、ワールドカップの実施、1980年代以後の普及の変化、これらのフットボールから派生してきた競技、及びパラリンピックで採用されたフットボール派生競技などの6つの面に絞った。

現在、サッカーが最も普及度が高く、200を超える国々でプレーされており、2014年には20回目のワールドカップがブラジルで開催された。ラグビーは、2015年には8回目のワールドカップを開催し、今年のリオデジャネイロでのオリンピックではセブンズが公式競技として実施された。アメリカンフットボールは、2015年に合衆国において第5回のワールドカップを開催した。オーストラリアンフットボールは、2002年から、3年ごとにインターナショナル・カップを開催している。ゲーリックフットボールは、1980年代よりも多くの国々でプレーされるようになった。カナディアンフットボールは、ハイレベルな競技が展開されているのは、カナダとアメリカに限られている。

キーワード：普及度（人気）、近代フットボール、アソシエーション・フットボール（サッカー）、ラグビーユニオン・フットボール、ラグビーリーグ、アメリカンフットボール、オーストラリアンフットボール、ゲーリックフットボール、カナディアンフットボール

Functional Movement Screenの活用について —高齢者に着目して—

森実由樹

要 旨

Functional Movement Screen (以下FMS) は、傷害を評価また予防するものではなく、テストによる左右非対称、疼痛の有無、不自然な運動パターンから傷害のリスクを予測するための指標である。FMSを行うことで、これから運動を開始する高齢者や運動経験のない者が、運動によって傷害を引き起こさぬよう、運動指導者にとって運動プログラム作成時の有益な手がかりを得ることができるであろう。

キーワード：FMS, Functional Movement Screen, 高齢者, 体力測定

開発途上国における日本の体育大学生による 体育・スポーツの国際協力

—スポーツ・フォー・トゥモローとの連携事業—

山平芳美, 高見令英, 松井完太郎, 木村寿一, 徳永文利

要 旨

本プロジェクト研究では、体育系大学とスポーツ・フォー・トゥモロー (Sport for Tomorrow : 以下, SFT) が連携したスポーツを通じた国際貢献活動の現状を把握し、本学の体育・スポーツを通じた国際協力がSFTと連携することによる双方のメリットを明らかにすることを目的とした。

本学はこれまで体育・スポーツを通じた様々な国際協力に取り組んできた。SFTに参加したことで、本学のこれまでの活動の幅により広がりがみられた。また、2020年に向けた本学の新たな国際貢献としてアピールの機会にもつながる。SFTにとっては、コンソーシアム会員間の連携や会員によるSFT認定事業の漸増は、SFTも活気付き双方にメリットがあると考えられる。

今後、本学のスポーツを通じた国際協力モデルを参考とする大学に本プロジェクト研究が共有され、オリンピック・パラリンピック・ムーブメントへの貢献と活性化につながることを期待したい。

キーワード：体育大学, オリンピック・パラリンピック, 国際貢献, SFT 認定事業,
ムーブメント

日本人大学女子柔道選手におけるSJFT (The special judo fitness test) と下肢骨格筋の動員様相について

大川昌宏, 矢崎利加

要 旨

女子柔道競技の1試合における投回数は男子柔道競技と比較をして多い。投動作については下肢のエネルギーを上肢へとつなげることが伝達されることが望ましい。そこで本研究では、日本人女子柔道選手を対象に、下肢骨格筋パワーと柔道競技のために考案されたスペシャル柔道フィットネステスト (The special judo fitness test : SJFT) との関連性、およびサンプル数の算出について検討することを目的とした。SJFTの2・3セット目は1セット目よりそれぞれ多い投回数であった ($d=5.00$ 以上, $p<.001$, 各power=1.00)。下肢の平均パワーやピークパワーとの間には負の相関関係がみられる傾向があったが、検定力が大きくなかったために被験者数を加算する必要があることが推察された。

SJFTには一本背負い投げを用いるという規定があるが、投動作については再考する必要がある。

キーワード：lower extremity, anaerobic power, wingate, combat sport, sport performance

地域における健康・体力づくりの企画と実践・成果

小西由里子 (国際武道大学), 井上哲朗 (国際武道大学), 森実由樹 (国際武道大学),
大川昌宏 (国際武道大学), 立木幸敏 (国際武道大学), 刈谷文彦 (国際武道大学),
松村さくら (国際武道大学), 谷口有子 (京都学園大学),
見波 静 (よしだ福祉会), 長濱秀紀 (勝浦スポーツクラブ)

要 旨

本プロジェクトの目的は、本学と近隣自治体の共同事業として2002年から継続している、定期的・継続的な集団運動型身体活動である、勝浦市「健康ハツラツ教室」、いすみ市(旧岬町)健康体力づくり事業の「運動教室」、2001年から実施している御宿町「健康・体力チェック」の企画や成果について、形態・体力・行動変容・QOLなどの観点からまとめ、近隣地域住民に対して今後さらに充実した協力・支援を行うための基礎資料を得るとともに、本学学生に実践的活動の機会を提供し、フィットネストレーナー志向の学生および武道健康福祉・スポーツトレーナー・健康科学コース等の学生に対する教育に還元していくことである。

週1もしくは2回の頻度で、半年間の定期的・継続的な集団運動型身体活動を実施した中高年男女においては、形態・体力・QOLの維持向上が認められ、修了者により自主運営するサークルへの参加を促した結果、会員数は「岬健康クラブ」56名、「大原健康クラブ」63名、「ニューはつらつ会」109名となり継続発展してきている。

キーワード：中高年, 健康・体力, 企画, 実践, 成果

子どもの発達過程と家庭環境の関連性に関する縦断的研究

高木誠一（国際武道大学）、中西 純（国際武道大学）、
佐藤記道（国際武道大学）、中村功樹（いすみ市立中根小学校）

要 旨

本研究は、文化的階層差という社会的生育環境差と、児童の生活習慣や認知的発達・学力との間に、どのような関連があるのかについて明らかにすることを目的としている。階層間格差問題に対する基礎的な知見を得ることを本研究の課題とし、仮説を「保護者の社会経済文化的背景が、保護者の学歴差と関連し、さらに保護者の学歴差が、児童の生活習慣差や認知能力差・学力差と関連している」とした。

結果から、文化的階層差という社会的生育環境差が、児童の生活習慣および学力に対して関連していることが明らかにされた。文化的階層差の背景には、特に経済的要因の効果量が大きかった。児童の生活そのものが文化的実践であることをふまえば、「必要性への距離」を保つことができる文化的階層を自らの社会的生育環境とする児童と、そうではない児童との間に様々な発達上の格差が生成されうることが示唆された。

キーワード：文化的階層，生活習慣，学力，児童

小野派一刀流における「切落」の由来について — 「三重」および「五点」を参考に —

立木幸敏 (国際武道大学), 仙土克博 (古流剣術研究会),
吉田鞆男 (研究所特別研究員, 古流剣術研究会)

要 旨

【目的】 著者らは先行研究において小野派一刀流の「切落」の仕様を明確にし、流派の体系の中で中心的な存在であることを検証し発表してきた。一方、「切落」がどのような由来によるものかは明らかになっていない。

本論では小野家に直接由来する資料を基に小野派一刀流成立以前からの組太刀とされる「三重」、「五点」に由来するものと仮説をたて検証をおこなった。

【方法】『小野家伝書』(春風館文庫蔵)は小野家初代・忠明から九代・忠政(業雄)までの各代に一刀流関係の伝書とその関係文書、さらに先祖書などを集めたものであり、特に四代・忠一(1658～1738)、五代・忠方(1713～1749)は「一刀流本目録」と「割目録」に詳しい解説を付けた文書を残している。しかし三代・忠於(1639～1712)の文章は掲載されていない。

また『津軽家文書』は、小野家三代・忠於から一刀流を伝授された弘前藩(津軽藩)四代藩主・津軽信政(1646～1710)及び息子の五代藩主・信寿(1669～1746)の稽古の覚書を中心とする一群の伝書であるが、その中の「剣術組造形覚書」には、「表五十本」「三重」「切落(5本)」など、一刀流の組太刀の仕様が詳しく記載されており、既報にて報告してきた。本論では「三重」とそれに加えて小野家伝書より「五点」に関する記述の中で「切落」に関わる所作を復元検証し由来についての検討を行った。

キーワード：Ono-ha Ittoryu (小野派一刀流), Kiriotoshi (切落), Goten (五点), Sanju (三重)